

飛躍する台湾産業



高付加価値車の輸出と内需育成で成長を続ける台湾の自転車産業

1.3億台—。世界的な環境保護や健康意識の高まり、レジャー産業の隆盛、中国における電動アシスト自転車需要の拡大などを背景に、世界の自転車生産は2007年には日本の人口と同規模まで拡大した。市場規模は200億ドル。台湾の自転車生産量は、1987年にピーク(1,022万台)を迎えた後、生産拠点の海外移転が進んだ2000年代前半には500万台を割り込んだが、2008年は650万台(前年比27%増)まで盛り返した。今回は、衰退から復活を果たし、世界市場に中～高級自転車を供給している台湾自転車産業を紹介する。

概況 世界3位の生産量と2位の輸出額

台湾で生産される自転車はほとんどが輸出向けであり、08年は生産量650万台の内、輸出が540万台、83%を占めた。輸出先は欧州(361万台)、米国(72万台)、日本(24万台)の順となっている。台湾には、完成メーカーと部品メーカーが合わせて約800社あり、約1.5万人が生産量世界第3位、輸出金額世界第2位(約13.8億ドル、いずれも08年)の産業を支えている。欧米や日本の自転車メーカーを顧客とするODM、OEM生産が盛んだが、巨大機械(ジャイアント)や美利達(メリダ)、愛地雅(イデアル)のように、国際的に競争力のある自社ブランドを持つ企業も育っている。これらの会社が本社を置く台中県や彰化県には、自転車産業のクラスターが形成されている。変速機やギヤクラック、カーボン繊維など、一部のハイエンド部材は輸入に頼っていたが、国産化に向け、研究開発が進められている。

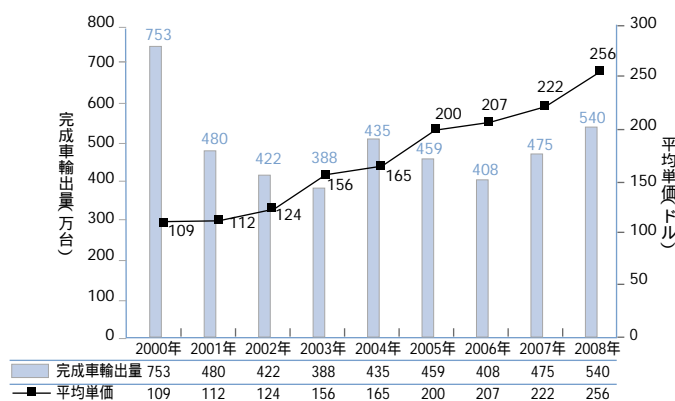
歩み 進む多用途、高付加価値化

台湾の自転車産業は、萌芽期に当たる1950～60年代、マウンテンバイクやロードレース用など製品の多様化と輸出拡大が進んだ70～80年代、生産拠点の海外移転による空洞化が進み、国内産業のグレードアップが図られた90～2000年代前半、高付加価値化とブランド化戦略が効を奏し再び成長期に入った2000年代後半と、時代ごとにその様相を変化させてきた。

図表1は、台湾産自転車の輸出量及び平均単価の

推移である。目を引くのは、平均単価が8年間で2.35倍(109ドル:00年 256ドル:08年)も上昇していることである。台湾自転車輸出同業公会(TBEA)の最新の統計(09年5月)では、さらに276ドルまで上昇している。この間、完成車メーカーと部品メーカーが協力し、「高品質、軽量、多用途化」の方向で製品開発を進めていった結果である。さらに近年では、中国や欧州市場のニーズを受け、電動アシスト自動車の本格的な開発、生産も始まろうとしている。この、近年の台湾自転車産業の「転換」と「進化」を支えているのが、2003年に結成された「A-TEAM」である。

図表1:台湾の自転車輸出量と平均単価の推移



出所) TBEA

A-TEAM 開発・生産体制を革新

90年代以降に台湾の自転車関連企業が中国移転を進めた結果、台湾メーカーが作る自転車全体の品質や価格が低下した。この環境変化に対し危機感を



抱き、台湾自転車産業のグレードアップを目的として、台湾に拠点を残した「Aクラス」の自転車関連企業13社（完成車メーカー：ジャイアント、メリダ、部品メーカー：天心、彦豪、鋹光、建大工業、正新橡膠等）が結成したプラットフォームが「A-TEAM」である（現在は21社が参加）。加盟社は国瑞汽車の協力を得て、ジャストタイム生産など「トヨタ方式」を導入、共同で品質管理、研究開発、マーケティング、トータルブランドイメージの向上までを行う体制を築いた。こうした試みにより、台湾全体の自転車供給量が回復し、平均単価は急上昇した。生産量はなお全盛期には及ばないものの、収益性は大幅に改善された。

自転車ブームと内需の掘り起こし

近年台湾では、「自転車の旅」をテーマとする映画がヒットしたり、自転車観光のガイドブックや特集雑誌が書店に並ぶなど、市場は裾野の広がりを見せている。また、アジア最大の見本市である「台北国際自転車展覧会」やタロコ国家公園で開催される標高差2,800mのヒルクライムレース（鉄屁之役＝お尻の戦い）など、特色あるイベントが毎年国内外から多くのファンを集め、内需の掘り起こしに貢献している。



楊銀明理事長

今回は、A-TEAMのメンバーであるタイヤメーカー建大工業の董事長であり、TBEAの理事長も務める楊銀明氏に台湾自動車産業の強みや展望について伺った。

TBEAについて

1992年に成立した自転車業界の互助団体で、約300社の完成車メーカー、部品メーカー、貿易会社が加盟しています。外貿協会など政府機関との連携による海外市場開拓や自転車産業振興のためのPR活動を行なっています。

台湾自転車産業の強みの背景は？

自転車産業は中小企業に適した産業であり、民間主導の成長が可能です。この点、台湾には技術力の高い中小企業が多く、発注者のニーズに応じて、

様々なタイプの製品を少量ずつ生産可能という強みがあり、海外からODMやOEMを受注して成長してきました。また、自転車業界生え抜きの情熱と経験を持った人材が、各企業のトップについている点も強みだと言えるでしょう。

輸出と国内販売の展望は？

高級自転車の輸出先は今は欧米が中心ですが、今後は富裕層が増えつつある中国、そしてまだ十分に攻めきれていない日本に注目しています。国内では、自転車ユーザーのさらなる開拓が重要だと考えています。現在台湾では、全国で自転車道路の整備が進んでいるほか、彰化県において、レジャーから博物館機能まで備えたバイクパークの建設が進行中です。また各種サイクリングイベントや国際レースを開催するなど、ハードとソフトの両面から台湾を「自転車の聖地」に育て、産業全体を盛り上げていきたいですね。